

令和8年度 第1回知多市子ども・子育て会議 要旨

【日 時】 令和8年6月12日（金） 午後2時から3時45分まで

【場 所】 福祉活動センター 大会議室

【出席者】

（子ども・子育て会議委員（敬称略））

日本福祉大学社会福祉学部教授	末 盛 慶
J E R A労働組合知多火力支部執行委員長	佐 藤 孝 司
朝倉保育園園長	加 藤 潮 音
一般社団法人B u m p y C o m p a n y代表	片 山 麻 有
知多市小中学校長会（旭南小学校校長）	小 栗 みどり
知多市P T A連絡協議会（知多中学校P T A副会長）	竹 内 延 宏
地域学校協働活動推進員	今 井 秀 明
知多市社会福祉協議会コミュニティソーシャルワーカー	横 山 嗣 信
主任児童委員	原 田 結為子
若者応援隊「まなざし」代表	中 野 しずか
やわた食堂代表	海老原 景 子
若者代表	加 藤 唯 汰
若者代表	新 海 咲百合
知多市福祉子ども部長	松 田 朋 子

（事務局）

福祉課長	杉 浦 理 恵
子ども若者支援課長	中 谷 誉 子
幼児保育課長	山 本 泉
幼児保育課 指導主事	杉 浦 弓 子
健康推進課長	浦 山 久 恵
学校教育課長	小屋敷 浩 司
学校教育課 指導主事	内 藤 健 司

子ども若者支援課	児童センター所長	近 藤 奈 美
子ども若者支援課	子育て総合支援センター所長	伊 藤 麻 理
子ども若者支援課	障がい児相談支援事業所長	山 下 陽 子
子ども若者支援課		渡 邊 達 哉
子ども若者支援課		廣 瀬 晶 子

【欠 席 者】

（子ども・子育て会議委員（敬称略））

椙山女学園大学人間関係学部教授	小柴住 まゆ子
-----------------	---------

【議事次第】

- 1 会長あいさつ
- 2 趣旨説明
- 3 委員自己紹介
- 4 議題
 - (1) 知多市こども計画の進行状況について
 - (2) こども計画の推進に向けた意見交換
 - (3) その他

【会議の概要】

1 会長あいさつ

日本の自殺者数は全体として減少傾向にあるが、子どもや若者世代の自殺率は依然として高止まりの状況にある。少子化が進む中で、厳しい環境で過ごす子どもや若者も少なくないのではないかと感じる。

保護者にとっては、特に保育園から小学校への移行期において、子どもが保育園や学校に行きたがらないといった悩みや課題を抱えるケースが多い。こうした現状を踏まえ、こども計画の策定・推進においては、子どもや若者の意見を積極的に取り入れることが求められている。

混乱を少しでも和らげ、安心できる環境を目指すため、皆さまのご意見やお力添えをいただきながら、取組を進めていきたい。

2 趣旨説明

資料確認及び知多市子ども・子育て会議設置要綱に基づき、本会議の趣旨について説明

3 委員自己紹介

委員及び事務局の自己紹介

4 議題

(1) 知多市こども計画の進行状況について

資料1 知多市こども計画の進行状況についてに基づき、事務局から令和7年度におけるこども計画の進行状況及び令和8年度の取組内容について報告
(質疑応答)

委員：今年度は小中学校でヤングケアラーの実態調査を実施したものの、子どもたちが質問にどれだけ正確に答えられるかが難しく、実態を完全に把握できたかどうか不安が残る。特に、家庭内の状況を当たり前と捉えている子どもたちについては、正確な実態を掴むことの難しさがあった。今後の調査では課題を抽出し、より具体的な方法を検討していく必要がある。

事務局：現在、子どもたちの状況をリスト化し、背景を分析しながら支援対象の絞り込みを進めている。保護者や教師によってヤングケアラーに対す

る認識の差があり、本当に支援が必要な対象が十分に抽出できているかが課題となっている。今後、毎年の調査を通じて改善を重ねていきたい。

委員：保育園では、高校生や中学生の兄や姉が子どもを迎えに来ることがある。保護者が仕事で迎えに来られないため、家庭内でその役割を担っているケースが多い。このような一部の家庭でトラブルが発生し、保育園としても心配になった場面があった。このような事例を通して、背景をきちんと把握することが重要だと感じる。

委員：保育園や幼稚園を通じてヤングケアラーを把握する方法はあるのか。

事務局：保育園では、支援が必要な家庭について各園が状況を把握しており、関係機関が参加する会議を設置して対応している。課題がある家庭があれば園から情報提供を行い、会議を通じて継続的な支援を検討し、体制を整えている。

委員：周りには独身男性が多く、特に30代で仕事が忙しく、良い出会いがないという悩みを抱えている人が多い。後輩たちに知多半島で縁むすびプロジェクトへの参加を勧めたいが、具体的な情報が見えづらい。せっかく良い取組をしているのだから、このプロジェクトに関する広報をもっと積極的に進めてほしい。

事務局：今年度の縁むすびプロジェクトは9月の実施を予定している。SNSなどを活用し、若い世代の目に留まるよう工夫していきたい。昨年度実施された他市での取組については、広報が不十分だったため、改善が必要だと考えている。いただいた意見は担当者と共有し、広報の方法を見直すとともに、他市とも連携していきたい。

委員：放課後児童クラブでは、指導員に高齢者が多く、昔ながらの厳しい教育のような対応が目立つ。例えば、子どもを皆の前で叱りつけたり、行儀の悪さを理由に足で蹴るなど、現代では許されないやり方が実際に行われているケースもある。学校ではきちんとルールを守っている子どもたちが、放課後くらいは自由にのびのびと過ごせる環境が必要だと思う。しかし、児童クラブや子ども教室では厳しい指導が続き、指導員の笑顔も少なく、寂しい印象がある。委託業者には、指導員の教育や運営方針

の改善をしっかりと伝えていただき、子どもたちが安心して楽しく過ごせる居場所づくりに力を入れていただきたい。

事務局：新年度から業者が変更され、以前より情報共有の頻度は増えている。

しかし、指導員の多くは以前の事業者から継続して勤務しており、対応の変更には時間がかかっている。市としては、支援が必要な子どもへの対応力向上を目的とした研修を計画し、指導員の質の向上を目指している。今後も情報共有を密にしながら、状況を注視し、改善に取り組んでいく。

委員：子どもの意見を聞く機会についての具体的な方法を知りたい。業者が変わってから、「以前はできていたことができなくなって、楽しくなくなったので行きたくない」という子どもの声を聞いている。こうした子どもの気持ちを反映する取組があれば、児童クラブや子ども教室の運営改善につながると思う。どのような方法があるか教えてほしい。

事務局：昨年度の取組では、児童クラブでテーマを設けて子どもたちから意見を集める方法を実施していた。今年度も同様の形を検討している。さらに、保護者向けアプリを活用して意見を収集する仕組みも視野に入れているが、具体的な方法に関してはまだ固まっていない。

委員：業者変更後の子ども教室について、ボランティアで講師をしている知り合いから「やりづらさを感じる、不満がある」との声を聞いた。

委員：児童育成支援拠点レンテの取組について具体的にどのような流れで子どもたちが支援につながっていくのかが気になる。また、相談窓口が増えている印象があるが、それらの情報や支援の連携・活用の仕方について教えてほしい。特に5歳児健診や巡回相談支援事業は、対象者が重複しているが、つながりが分かりづらい。制度や担当課の違いによる調整や情報共有がどのように行われているか、具体的な仕組みを教えてほしい。

事務局：児童育成支援拠点レンテについて、学校に行けない子どもたちに対して支援者が個別に対応し、付き添いながら支援につなげている。

各種相談事業については、保健センター、子ども若者支援課、幼児保

育課が連携し、支援会議を毎月行うことで連携を進めている。

例えば、5歳児健診後のフォローが必要な場合は、虹色ちたっこ相談や巡回相談につなげる動きがある。今年から心理士を配置したことで、健診後のフォロー強化と適正な就学支援を進める予定。

委員：青少年へのサポートについて、どのような具体的取組を考えているか教えてほしい。助けが必要な子どもや親が相談できる窓口があるなら、その情報も知りたい。

事務局：こどもカウンセリングという新しい相談事業を今年度から開始した。この事業は、悩みを抱えている子どもやどこにも所属がない子ども、そしてその親が気軽に相談できる窓口として位置付けられている。中学生以下の子どもに関しては親が申し込み、親と子が一緒に来庁してで相談を行う形式。高校生以上は本人による予約申し込みで対応している。今年5月から公認心理士を配置し、子育て総合支援センターで実施している。始まったばかりの事業で認知度がまだ十分ではないため、今後はPRを強化していきたい。

委員：今の時代、子どもの多くはAIに相談をすることが一般的になっている。わざわざ足を運ぶ場合は、かなり深刻な悩みを持っている時だと思う。こどもカウンセリングをPRする際には、専門の相談員がいるという点をしっかりアピールすると良い。加えて、専門家と直接話すことでどのようなメリットが得られるのかを具体的に伝え、関心を持つ人が増えるのではないかな。

事務局：専門の公認心理師による直接の相談を通じて、外に出るきっかけを持ち、人と直接会う経験を積むことで、心が軽くなることを期待している。子どもやその家族に周知するための方法については、今後さらに模索していく。

(2) こども計画の推進に向けた意見交換

委員：各課が家庭を含めて多岐にわたり連携している点は評価できる。しかし現場で活動している人たちの立場からしても、政策が十分に伝わって

いない側面が見受けられる。新規事業に関しては試行錯誤が必要だとしても、既存の事業については連携のつながりが見えづらい状況がある。良い取組を行っているので、利用が促進されるよう、特に若い層の目に留まる工夫をした広報等に力を入れていただきたい。SNSの活用などを積極的に検討してほしい。

委員：5歳児健診が始まり、支援が必要な子どもたちが療育へつながることを期待している。一方で、療育の受け入れ施設が不足することを懸念している。療育と保育園を並行して利用する子どもが増えており、他市の児童発達支援施設を利用するケースも見られる。受け皿となる施設が増えれば良いと思う。

委員：児童発達支援事業所を運営する中で、養育力の向上を必要とする家庭が増えていると実感している。小学校進学後の子どもがトイレに行けない、ルールを守れない、集団生活に馴染めないなどの問題が増加しており、支援の必要性が高まっている。こういった家庭に対し、関係機関がしっかり連携して支援する必要がある。

委員：学校だけでは解決できない問題が増えている中、関係機関との連携により解決や改善が図られた事例が多くあった。子どもたちが安全で安心して過ごせるよう、今後も関係機関同士が協力して連携を深めていきたい。

委員：コミュニティスクールは順調に進んでいる。導入に向けたノウハウが既に蓄積されているので、これから導入を目指す学区においても、比較的スムーズに事業を展開できるのではないかと感じている。

子ども食堂について、昨年度と比べて実施箇所が減っている。この減少の要因について、そして今後の取組に関する具体的なプランがあれば教えてほしい。

委員：社会福祉協議会は子ども食堂の広域的なサポートを行っている。減少の理由について、1つ目の食堂は活動拠点を市外に移したことが挙げられる。もう1つの食堂は、コロナ禍で収入が減少した生活困窮者を支援対象としており、そのような利用者が減少したことから食堂の目的を果

たしたと判断し、終了した。今後の動向については、新たに2つの企業が社会貢献の一環として子ども食堂を実施したい意向を示している。1つは、谷新聞店が7月25日に子ども食堂をオープンさせる予定で、ボランティアも順調に集まっている。もう1つはトモ愛知から子ども食堂をやりたいと相談があった。

委員：企業が子ども食堂に参入することは良いが、企業は社会情勢の影響を受け撤退しやすい側面がある。安定的な継続ができる仕組み作りを検討してほしい。

委員：子ども食堂を継続するためには資金や人材の確保が課題になっている。開催場所や食材確保には費用がかかる一方で、収入はほぼない状況が続いている。現在は助成金や寄付で賄っているが、今後も活動が続けるための仕組みが必要。市の補助金は1回開催ごとに3,000円が支給されているが、継続的な活動支援をお願いしたい。

委員：会議に初めて参加してみて、初めて知った点が多かった。これほど多くの取組が行われているので、周知にもっと力を入れるべきだと感じた。自身が子ども・子育て会議に参加したのも、親に勧められて応募したからであり、普通の生活をしていたらその存在に気付かなかったと思う。

縁むすびプロジェクトについて、自分の周りではマッチングアプリを利用している人が多いが、地元で安全に出会える場が設けられている点は良い取組だと感じた。

現在、自分がアルバイトをしている児童クラブでは職員が子どもに不適切な表現を使う場面は見えていないが、場所による差はあると考える。同じ職場で長く働いていると、自分流のやり方が定着してしまったり、慣れが出てくることで不適切な指導につながる可能性があるのではないかと感じる。

委員：子どものために様々な施策が進められていてありがたい。旭公園への床噴水デッキの設置も良い取組だと思うが、幼児や低学年の子ども利用が中心となる。近年、ボール遊びができない公園が増えた結果、遊び場が不足していると感じる。高学年の子どもが暑い夏でも使える室内

型の遊び場を整備できると良い。

委員：子ども食堂について、補助金が1回あたり3,000円出ているという話があったが、現状では1年間の活動を終えた後に赤字になった場合だけ支給される仕組みになっている。県の物価高対策助成金があったおかげで黒字運営できた食堂が多かったが、財政面で苦しい状況にある。継続的な運営のためには、多少貯めておける資金が必要だと思う。

私が活動しているこどものまちの事業について、昨年で10年目を迎えた。10年前に子どもスタッフとして参加してくれた子が、現在は大人応援団として子どものために活動している姿を見ると、継続してきた意義を強く感じる。社会情勢が大きく変わる中でも、子どもは10年前と変わらず無邪気に遊び続けている。この純粋な心を大切に、この事業を今後も続けるべきだと考える。

委員：乳児期からの切れ目のない支援が充実している一方で、中学校卒業後に高校や仕事を辞めた場合や所属がなくなった場合に福祉がどのように関わるのかが課題だと思う。「まなざし」に通う保護者からも、教育と福祉がつながっておらず、困難を抱えているという話を聞いた。青年期の支援がもう少し厚くなる必要があると感じている。

自分が活動している団体では引きこもり支援を行っており、最近では東海市からの利用が増えている。その背景には、東海市の委託事業者が変わり、人間関係の構築がうまくいかないことがある。支援についても利用者によって合うもの・合わないものがあるので、若者の居場所がさらに増えることが望ましい。

「地域のこと語ろう会」がきっかけとなり、佐布里の防災ボランティア団体と連携し、地域につながるためのお祭りを3月に開催した。このイベントを機に、地域の方々が自分たちの行う中間的就労体験の場へお茶を飲みに来てくれる機会が増えた。少しずつ地域とのつながりを実感している。

委員：産婦人科で看護師を30年続けてきて、この30年間で妊婦を取り巻く環境が大きく変わったことを実感している。家族関係や夫婦関係の多

様化・複雑化により、うまくいっていない家庭も増えている。虐待やトラブルが増加傾向にある現場を目にするにつれ、家庭の養育力向上が必要だと痛感している。性教育も生きるための性教育として、自分を大切にする基本を学ぶ内容に変えていくべきだと考える。

委員：福祉教育の関係で小中学校を訪問し、不登校の子どもたちをどうサポートするかに関して校長や教頭と話し合う中で、学校以外の地域に子どもたちが参加できる場所の必要性を感じた。スクールソーシャルワーカーとコミュニティソーシャルワーカーが密に連携し、地域づくりを進めることで、不登校の子どもたちを支援していきたい。岡田地区にあるおかだ食堂が7月に子ども主体で活動できる食堂の実施を予定している。我々も協力しながら、ボランティアの機会や子どもたちの意見を聞く機会を作り、主体的に関われる場を提供していきたい。大興寺にあるちた福寿園では、子どもと高齢者が交流できる居場所として施設を開放する予定。東部地区は、子どもの学習スペースや居場所を求める声が挙がっている。八幡台の集会所を利用した中学生向けの学習スペースを計画しており、東部中学校に協力を依頼し、手上げ制で中学生の参加を募る予定。この企画を通じて中学生とともに居場所づくりを進めていく構想を練っている。今後も地域や学校との連携を強化し、このような活動を広げていきたい。

(3) その他

第2回子ども・子育て会議について2月頃を予定。後日に日程調整を行う。

以上